

復活信仰の宗教史的土壌を探る¹⁾

中 野 実

序論

新約聖書の信仰は突然天から降ってきたような抽象的な信仰ではない。地にしっかり足をつけた信仰である。一体どのようにそのような信仰が生まれてきたかを知るために、最初期キリスト教の宗教史的土壌に注目する必要がある。この論文の目的は、そのような問題意識に基づきながら、初期キリスト教の母体となった第二神殿時代後期（ヘレニズム・ローマ時代）のユダヤ教に目を向け、復活信仰の宗教史的土壌を探ることである。

ただしこの論文におけるリサーチは、学術的に新しい成果を追求するものではなく、どこまでも啓発的な目的に基づく。つまり、キリスト教信仰を歴史的文脈に位置づけることの大切さを知ってほしいという意図に基づくものである。

なぜ歴史的土壌にこだわるのか。その神学的前提について一言述べたい。そこでまずヨハネ 1:14 に注目したい。これは受肉、神が人となられた出来事について語っている箇所である。神の永遠のロゴスであられた方が本当に深く人間の現実の中に入ってこられた。それは、私たちが神に作られた本来の人間として、さらにすべての被造物も新しく創り変えられるためである。

もちろんキリスト教信仰が明らかにする現実、歴史や社会に還元できる事柄ではない。すなわち、超越の次元（神）に関わる現実である。しかし同時に、信仰は歴史や社会と切り離せないものである。その信仰は受肉された神に関する信仰だからである。そうでなければ、信仰が人間を具体的に生かすものにはな

1) この論文は、2022 年度後期の始業講演（2022 年 9 月 20 日）に基づくものである。

りえない。歴史から遊離した抽象的な信仰から脱却することが大切である。その目的のために、歴史的探求は神学にとって極めて重要な役割を果たすのである。

宗教史的研究とは何か。簡単に言えば、新約聖書に現われる概念や思想のルーツを周辺世界の中に探す研究の立場である。そのような研究が盛んになった発端は20世紀初めにドイツで起こった「宗教史学派」の運動であり、キリスト教の起源をユダヤ学、西洋古典学、オリエント学にまたがって研究することを試みた学際的運動である。しかし、彼らの研究成果にはもはや現在では通用しないものも多く含まれている。

宗教史的研究自体は、その後も精力的に行われ続けており、中でも新約聖書の信仰のルーツを旧約聖書および第二神殿時代ユダヤ教に求める研究はとくに重要である。この論文で試みたいことは、原始キリスト教（最初期キリスト教）の中心的確信であった復活信仰の宗教史的土壌を、主として第二神殿時代ユダヤ教の文献に注目しながら探究することである。ただし、時間的能力的限界のゆえに、おおざっぱなスケッチにとどまることをあらかじめご了解いただきたい。

本論

I リサーチの前提となる事柄について

(1) キリスト教信仰誕生の時代史的背景

キリスト教信仰は、紀元1世紀のパレスチナおよびディアスポラのユダヤ人社会に根を張っている。ユダヤ人にとって紀元1世紀という時代は、いわゆる「第二神殿」がエルサレムにあり、それを中心に社会が成り立っていた最後の時代である。しかもその社会はヘレニズム文化からの影響を強く受けつつ、政治的にはローマ帝国の支配下にあった社会である。

キリスト教は「イエス運動」（ゲルト・タイセンの造語）として出発した。紀元1世紀の（ほとんど無名の小さな村）ナザレ出身のユダヤ人男性イエスに由来する運動である。まだ紀元1世紀においてキリスト教は独立した宗教と

してユダヤ教から分離してはいない。むしろ、パレスチナ・ユダヤ人社会の改革運動として理解されるべきである。パレスチナ・ユダヤ人社会が経験していた様々な危機を背景に生まれた運動であるという側面については、ゲルト・タイセン『イエス運動——ある価値革命の社会史』廣石望訳、新教出版社、2010年を参照せよ。

(2) イエス運動が直面した危機と新しい出発

〈イエスの十字架とは何であったのか?〉

ナザレのイエスの死、それは殺害の死である。イエスは、紀元 30 年にエルサレムの都の外でローマに対する反逆者として、メシア僭称者として十字架刑（磔刑）に処され、死んだ。この事実は、歴史的に見て最も確実なことのひとつである。十字架刑（磔刑）は、その当時ローマ帝国の極刑で、主に謀反外国人、凶悪犯、強盗、奴隷に対する刑罰として用いられた。その意味で、イエスは「ローマの平和」（Pax Romana）の犠牲者（victim）と言えるかもしれない。数多くの人々（多くのユダヤ人も）がローマ帝国によって十字架刑に処せられた（例えば、ヨセフス『ユダヤ戦記』5:449-51 を参照）。しかし、イエスの十字架もその多くの一つであったにもかかわらず、イエスの場合はなんともユニークな展開をむかえる。弟子たちは、復活の出来事ののち、そのイエスの十字架の只中に神の救いの業を発見したのである。

〈救いの出来事としてのイエスの十字架〉

復活後の弟子たちの確信によれば、ゴルゴタでの出来事は歴史に転換をもたらす決定的な出来事、終末的な（歴史の終わり、新しい世界への転換点をもたらす）事態であった。まるで悪の力に飲み込まれてしまった出来事に見えるイエスの十字架は、じつはそうではなく、反対にすべてがイエスの十字架に飲み込まれ、新しく造り変えられる決定的・終末的な出来事であったという発見がそこにあった（例えば、マコ 15:33 以下 [および並行記事] を参照）。もちろん、弟子たちはそのような理解、解釈に、イエスの復活という出来事を経てはじめ

て達し得た。イエスの復活という出来事の光のもとで、イエスの十字架を見直した時に、その十字架の出来事はまったく新しく見え始めた。

〈復活の出来事とその信仰の成立〉

ナザレのイエスの十字架の死から三日後、散り散りバラバラになってしまったはずの弟子たちが再び集まり、「イエスは復活された」と告げ始める。十字架に架けられて殺されたイエスが「生きている方」として弟子たちに現われたという出来事こそが、イースターの出来事であり、キリスト教信仰の出発点とも言える。新約聖書の言葉遣いにより近い表現を用いると、「神はイエスを死者たちの中から起こした」(ロマ 10:9),「(キリストは) 起こされた」(I コリ 15:4, 20),「イエスは死んで、そして立ち上がった」(I テサ 4:14),これが復活に関する弟子たちの最初の信仰であった。

しかし、どうしてそのように弟子たちは信じ得たのか。じつは復活信仰には深い根があり、豊かな土壌があったのである。そこで、そのような信仰を生み出した宗教史的、時代史的土壌に目を向けてみたい。

補遺 1 時代史年表²⁾

前 722 年	(アッシリアによる) サマリア陥落, 北王国イスラエルの滅亡。
前 587 年	バビロニア, エルサレムを破壊。ソロモンの神殿 (第一神殿) の破壊。南ユダ王国の滅亡。それ以来, バビロン捕囚が前 538 年まで続く。
前 538 年	ペルシア王キュロスの勅令。帰還がゆるされる。 パレスチナおよびシリアはペルシアの属州となる。
前 515 年	第二神殿の完成。第二神殿時代は, 後 70 年まで続く。 この時代のユダヤ教は, 第二神殿時代ユダヤ教あるいは初期

2) 年表作成に関しては, 山我哲雄, 佐藤研『旧約新約聖書時代史』教文館, 2000 年を参照した。

ユダヤ教と呼ばれる。

- 前 333 年 アレクサンドロス大王, シリア, パレスチナを併合。
アレクサンドロスの帝国 (前 336-323 年)。
彼の死後 (前 323 年), 後継者 (ディアトコイ) による勢力争い。パレスチナをめぐるのはエジプトのプトレマイオス王朝とシリアのセレウコス王朝との間で争奪戦が起こる。
この時期以来, パレスチナにおけるヘレニズム化が進んでいく。
- 前 3 世紀半ばまでに, アレクサンドリアにおいて 70 人訳聖書 (モーセ五書の部分) の成立。
- 前 198 年 パレスチナ, シリアのセレウコス王朝の支配下に入る。
- 前 169 年 過激なヘレニズム化の強要。
セレウコス朝の王アンティオコス 4 世エピファネス, エルサレム神殿に侵入。
その後, 前 167 年にユダヤ教の禁止令。
- 前 167-162 年 マカベア戦争 (ハスモン家を中心とする反乱)。
反ヘレニズム運動。ハシディームの活躍。
- 前 164 年 エルサレムを奪回。神殿を浄める (ハヌカー祭の起源)。
その後, ようやくユダヤ人自身による王朝, ハスモン王朝の時代をむかえる。しかし, 権力争いなどが起こり, その時代に多くのユダヤ教内のセクト (分派) がおこる。サドカイ派, ファリサイ派, エッセネ派など。黙示思想の誕生, メシア期待が強まる。
- 前 63 年 (共和制ローマの指導者) ポンペイウスが, ハスモン家の抗争を利用して, ユダヤに進出。ユダヤはローマの属州シリアに編入。
- 前 40 年 ヘロデがローマでユダヤの王に即位。前 37 年, ヘロデはエルサレムを征服。それ以来, 彼の死 (前 4 年) までヘロデ大王

の王国が続く。前 20 年からヘロデは、エルサレム神殿の改築を開始。改築は後 64 年まで続く。

前 27 年－後 14 年 ローマ皇帝アウグストゥス（＝オクタウィアヌス）の治世。

前 6 年頃？ ナザレのイエスの誕生。

前 4 年 ヘロデ大王の死。遺言によって、三人の息子に王国は分割される。

しかし、ローマから王位を得る事はできなかった。アルケラオスには、イドマヤ、サマリア、ユダヤ（前 4 年－後 6 年）。ヘロデ・アンティパスには、ガリラヤとペレア（前 4 年－後 39 年）。フィリッポスには、北トランス＝ヨルダンの地方（前 4 年－後 34 年）。

後 6 年 アルケラオス失脚、ガリアに追放。その結果、ユダヤはローマの属州になり、ローマから送られたユダヤ総督による直接統治に入る。

シリア総督クイリニウスによる人口調査（ルカ 2 章）。ガリラヤのユダによる反乱も起こる。

後 14－37 年 ローマ皇帝ティベリウスの治世。

後 26－36 年 ユダヤ総督ポンティウス・ピラトゥス。

後 30 年頃 イエスの処刑。

後 37－44 年 ヘロデ・アグリッパ 1 世、旧フィリッポス領の王となる。

さらに 39 年には旧ヘロデ・アンティパス領を併合。

41 年にはユダヤとサマリアも得る。

使徒行伝 12 章、ゼベダイの子ヤコブの殉教（42/43 年）。

後 44 年 アグリッパ 1 世の死後、ユダヤは再びローマの属州になる。

後 49 年 クラウディウス帝（41－54 年）によるローマからのユダヤ人の追放（使徒行伝 18 章）。

後 64 年 皇帝ネロのもと、ローマにおけるキリスト教徒の迫害。

ペトロとパウロ、ローマで殉教？

後 66-70 年 第一次ユダヤ戦争

ゼーロータイ（熱心党）の登場。

ローマ皇帝ウェスパシアヌス（在位後 69-79 年）。

70 年，ウェスパシアヌスの息子ティトゥスによってエルサレムを征服。神殿炎上。

73 年，マサダ陥落。

ヨセフス『ユダヤ戦記』を参照。

後 70 年以降，ユダヤ社会の再建，ラビ・ユダヤ教の成立へ向かう。

後 132-135 年 第二次ユダヤ戦争（=バル・コクバの乱）。

Ⅱ 第二神殿時代ユダヤ教の復活信仰について

(1) 復活の定義

復活＝死後の命と言えるか。復活とは，死んですぐに入る命という意味ではない。古代のユダヤ人の間では死における存在は何らかの形で信じられていた。死んだ者は誰もが影のような存在となり，「シェオール」という場所に行き着くことになる（詩 89:49，コヘ 9:10 など）と信じられていた。

それをふまえると，復活信仰は，単純に死後の存在についての確信にとどまらない。むしろより正確に表現すれば，死における存在を超え出る新しい命への確信である。N. T. ライトの表現によれば，「死後のその後の命」こそが復活の命である³⁾。

(2) 復活信仰の展開

前 3 世紀から後 2 世紀にわたる，第二神殿時代ユダヤ教後期の時代に，そのような復活への確信は大きな展開をむかえる。その時期に，復活への確信は多くのユダヤ人たちによって共有されるものとなる（例外はサドカイ派）。後 1 世

3) N. T. Wright, *The Resurrection of the Son of God* (Minneapolis: Fortress Press, 2003), 30-31.

紀に誕生した原始キリスト教の復活信仰もまた、その土壌から生まれてきたものと見なしうる。

(3) 復活信仰が現われている第二神殿時代（後期）ユダヤ教諸文書

復活に関する確信はかなり複雑であいまいさを含む仕方では表現されており、これこそが復活への言及だと断言することは難しい。しかし、何らかの意味で復活信仰につながると思われる言及箇所を拾い上げてみると、第二神殿時代ユダヤ教文献のかなり多くの中に発見することができる。例えば、以下のようなものが挙げられる。

旧約聖書正典

ダニエル書 12 章などに注目。

旧約聖書外典・偽典⁴⁾

・『ソロモンの詩編』

18 の詩を集めた文書で、原語はヘブライ語と思われるが、現存するのはギリシア語とシリア語のテキストである。神の王的支配、メシア待望についての言及も見出される。ポンペイウスの死（前 48 年）についての言及もあるので、執筆年代は前 1 世紀終わり頃と考えられる。

・『ソロモンの知恵』

知恵文学の一つ。成立地はアレクサンドリアと思われる。ユダヤ教とギリシア哲学とは両立するものと考えられている。前 2 世紀から後 1 世紀にかけての文書。パウロも本書を利用している可能性あり。

4) 大まかに言えば、旧約聖書外典・偽典とは前 3 世紀から後 2 世紀頃にかけて執筆された古代のユダヤ教文献で、旧約聖書正典（39 書）に入らなかった文書を指す。旧約聖書外典・偽典の概論については、土岐健治『旧約聖書外典偽典概説』（教文館、2010 年）を参照。

・『十二族長の遺訓』

遺訓文学と呼ばれるジャンルに属する文書で、現存するギリシア語テキストなどの背後にはヘブライ語の原テキストがあると想定される。元々ユダヤ教の著作であったが、後にキリスト教徒による編集の手が加えられて伝えられてきた文書である。本論文では、復活信仰に関して、「ユダの遺訓」、「ベニヤミンの遺訓」、「ゼブルンの遺訓」に注目する。

・『アダムとエバの生涯』

創世記に対するミドラシュのような文書で、ラテン語伝承とギリシア語伝承で伝えられており、後者は「モーセの黙示録」と呼ばれてきた。元となったユダヤ教文献は、前1世紀から後1世紀頃の文書である。

・『エチオピア語（第一）エノク書』

最近の学者が「エノク派」と呼ぶグループを背景に持っているが、異なる時期に書かれた5つの文書の集成である。1-36章「寝ずの番人の書」（前3世紀）、37-71章「たとえの書」（後1世紀）、72-82章「天文の書」（前4-3世紀）、83-90章「夢幻の書」（前164年頃、ダニエル書と同時期）、91-108章「エノクの手紙」（前100年頃）。原語はアラム語であったが、全体が現存しているのは（ゲーツと呼ばれる古代の）エチオピア語テキストのみなので、エチオピア語エノク書と呼ばれる。復活信仰に関しては、「寝ずの番人の書」、「たとえの書」、「エノクの手紙」に注目する。

・『第二マカベア書』

前167-164年のマカベア戦争について書かれた文書で、前124年にエジプトで神殿奉献祭が行われた際に執筆されたと思われる。キュレネ人ヤソンの5巻の書物をもとにして書かれたもので、元々ギリシア語で執筆された。

・『第四マカベア書』

後1世紀にギリシア語で書かれた文書で、「敬虔な理性は情念を支配するか否か」という、すぐれて哲学的な議論（1:1）を展開するために、マカベア戦争時代の殉教者たちに注目する。

・『ヨブの遺訓』

いわゆる「遺訓文学」の一つで、死の床にあるヨブが子孫を呼び集めて遺訓を語るという内容の文書である。後1世紀にギリシア語で書かれた文書である。

・『ベン・シラの知恵』

ヘレニズム文化に対抗しようとする意図で書かれた知恵文学の一つ。前2世紀初めにベン・シラによってヘブライ語で書かれ、後にその孫によってギリシア語に翻訳される。70人訳に収められた。

・『第四エズラ記』

(エルサレム神殿が崩壊した) 後70年以降に生み出された黙示文学の一つ。現存している最重要テキストがウルガタ訳のラテン語テキストなので、エズラ記(ラテン語)とも呼ばれる。原語はヘブライ語と思われる。

・『第二(シリア語)バルク黙示録』

第四エズラ記と同様、後70年以降に成立した黙示文学の一つ。現存のシリア語テキストはギリシア語訳からの翻訳と思われるが、原語はヘブライ語と思われる。

・『聖書古代誌(偽フィロン)』

旧約聖書の物語を再話した後1世紀の文書で、フィロンのものと間違って考えられたことから、「偽フィロン」と呼ばれてきた。ヘブライ語が原語と思われるが、現存しているのはラテン語テキストである。

・『アブラハムの遺訓』

族長アブラハムの死を扱った聖者伝説のような作品で、後2世紀のエジプトのユダヤ人に由来すると思われる。現存しているのはギリシア語テキストである。

・『偽フォキリデス』

前6世紀の詩人フォキリデスを名乗った偽書。前1世紀から後1世紀頃の作品。

・『シビュラの託宣』第4巻

前2世紀頃以来、「シビュラ」(年老いた女性の預言者)を名乗って、預言を展開する偽書が生み出されたが、第4巻はディアスポラのユダヤ人に由来する

後1世紀頃の作品と思われる。

死海文書

死海沿岸のユダの荒野で1946/7-1956年頃までに11の洞窟から発見された膨大な数の文書断片のこと。旧約聖書や古代ユダヤ教文書の写本から成る。膨大な文書断片のうち、復活信仰に関しては、再話聖書（the rewritten Bible）の一つ「偽エゼキエル」（4Q385）と、「メシア的黙示録」と名付けられた4Q521に注目する。

ヨセフス（後37-100年頃、ユダヤの歴史家）

『ユダヤ戦記』『ユダヤ古代誌』『アピオンへの反論』。『戦記』および『古代誌』では、サドカイ派、ファリサイ派、エッセネ派に関する復活信仰をめぐる興味深い言及が見られる。

その他、『十八祈禱文』（アミダー）、70人訳聖書。

（参考文献）

本論文で紹介される第二神殿時代ユダヤ教テキストは、特記される場合以外は、以下の参考文献からの引用である。

旧約聖書正典、および旧約聖書外典（旧約聖書続編）については、『聖書』（聖書協会共同訳）（日本聖書協会、2018年）。

70人訳聖書については、Alfred Rahlfs and Robert Hanhart, eds., *Septuaginta: Editio altera* (Stuttgart: Deutsche Biblegesellschaft, 2019) を参照。

旧約聖書偽典については、日本聖書学研究所編『聖書外典偽典』Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、補遺Ⅰ（教文館、1975-1979年）、および James H. Charlesworth, *The Old Testament Pseudepigrapha*, Vol.1-2 (New York: Doubleday, 1983-85) を参照。さらに『聖書古代誌』については、井阪民子、土岐健治訳『聖書古代誌 偽フィロン』（教文館、2012年）を参照。

死海文書については、死海文書翻訳委員会訳『死海文書』（おねうま舎、2018年-）を参照。「偽エゼキエル」（4Q385）については、死海文書翻訳委員会訳『死海文書Ⅶ 聖書の再話2』（おねうま舎、2019年）を参照。死海文書全体のテキストおよび英訳に関しては、Florentino Garcia Martinez and Eibert J. C. Tigchelaar, *The Dead Sea Scrolls: Study Edition* (Vol.1-2; Leiden: Brill, 1997) を参照。

ヨセフスの著作については、フラウィウス・ヨセフス『ユダヤ戦記』Ⅰ-Ⅲ（秦剛平訳、ちくま学芸文庫、2002年）、『ユダヤ古代誌6』（秦剛平訳、ちくま学芸文庫、2000年）、『自伝／アピオンへの反論』（秦剛平訳、青土社、2020年）を参照。

Ⅲ 復活信仰の宗教史的土壌としての第二神殿時代ユダヤ教

(1) 死を越える命への信仰——その旧約聖書のルーツ

〈死における存在〉

旧約聖書に見られるイスラエル人たちの古い信仰によれば、人間は塵^{ちり}にすぎず、ただ神の霊によってのみ生きるものとされる。以下の箇所を参照。

「神である主は、土の塵で人を形づくり、その鼻に命の息を吹き込まれた。人はこうして人間は生きる者となった」（創2:7）。

「あなたは塵だから、塵に帰る」（創3:19）。

死は塵に帰ることであり、その意味では死は自然なことで考えられた。死においてはすべての人が平等である、という考え方も見られ、王ですら例外ではない。古い時代のイスラエル人たちは、彼岸の世界をあまり重視しなかったように思われ、神と人（神の民）との契約も此岸の世界のこととされ、死の世界は

神の手すら届かない世界と考えられた⁵⁾。例えば、以下の箇所を参照。

「あなたは死者のために奇しき業をなさるでしょうか。死者の霊が起き上がって、あなたをほめたたえるでしょうか」(詩 88:11)。

では、死んだ者は一体どうなるのか。多くの古代のユダヤ人たちは、死者が消え去ってしまうのではなく、何らかの意味で死者が行き着く場所があり、そこにとどまっているという漠然とした理解を持っていたようである。その場所はシェオールと呼ばれ、そこで死者は影のような存在としてとどまっていると考えられた。

「誰が生きて、死を見ず、陰府（シェオール）の手から魂を救うことができるでしょうか」(詩 89:49)。

以上のような見解に対する反論があるが、ここではその問題に立ち入ることをしない⁶⁾。

〈唯一神信仰と死に関する思索〉

しかし時代の移り変わり、他文化との接触を通して、次第に新しい考えが生まれ、死は自然なものというより、むしろ脅かす悪しきものとして捉えられ、すべての被造世界の唯一の主であるイスラエルの神は死においても働き、死を克服してくださる、との信仰へと発展していく。例えば、

「死を永遠に呑み込んでくださる。主なる神はすべての顔から涙を拭い、

5) 並木浩一「旧約聖書の死生観」村上伸編著『死と生を考える』(ヨルダン社、1988年) 105-112頁。

6) 詳しい議論については、田中光「旧約聖書と『永遠の命』(前編)」『神学 82号』(東京神学大学神学会、2020年) 5-30頁を参照。

その民の恥をすべての地から消し去ってくださる」(イザ 25:8)。

「あなたの死者は生き返り、私の屍は立ち上がります。塵の中に住む者よ、目覚めよ、喜び歌え。あなたの露は光の露、地は死者の霊に命を与えます」(イザ 26:19)。

このような古代イスラエル人たちの死をめぐる思索は、彼らの唯一神信仰の展開と深く結びつく形で展開されていったと言ってよいであろう。

〈神の民の死と再生〉

世界の創造者である唯一の神は、生においても死においても義をもって裁きをなさる方である。イスラエルは神の民であるが、その罪のゆえに神は彼らを罰せられる方でもある。じっさい彼らはバビロン捕囚のような民族崩壊の危機を経験し、それを神の裁きとして理解した。しかし同時に、神はご自分の民の忠実な父であられるがゆえに、神の民の回復を願われ、実現しようとなさる方でもある。この関連で、バビロン捕囚の時代、預言者エゼキエルが見たとされる幻に注目したい(エゼ 37:1-14 を参照)。それによれば、枯れた骨が谷の中に満ちているが、それらに神の霊が吹き入れられると生き返る。神の民イスラエルの再生の希望と結びついた幻である。この箇所は、復活と結びつけられて理解されるが、(個々人の死後の復活という)字義的な意味ではなく、むしろ(民族の再生という)比喩的なイメージにおいて人間の復活が語られる。

この箇所は後に、より字義的な意味で理解されるようになる。その例として、死海文書の一つ 4Q385「偽エゼキエル」(前1世紀の文書)を挙げることができる。それによれば、エゼキエルの幻に基づいて、義人の報いとしての復活が語られる。

「[そして私は言った、『ヤハウエよ]、私はイスラエルからの多くの者たちを見ました。あなたの名を愛し、[あなたの心]の道を歩んだ者たちを。

「そこで、こ」れらはいつあるのでしょうか。また彼らの敬虔に対して彼らはどのように報われるのでしょうか。そこでヤハウエは私に向かって言った。『わたしは（それを）イスラエルの子らに示す。そして彼らはわたしがヤハウエであることを知るだろう』。（余白）「そしてかれは言った」、『人の子よ、骨たちに預言して言え。そして骨がその骨に、関節が[その関節に] 近[づ] くように。……』」（『偽エゼキエル』[4Q385] 断片二、2）。⁷⁾

以上見てきたように、死を越える命への思索は、深く旧約聖書の中に根を持っている。とくに唯一神信仰の展開と共に、死を越える命への思索が深められていった点は重要である。しかも、死を越える命の思索は、個人的運命にとどまらず、集团的レベルで、つまり神の民の運命との関連で展開されていった点も見逃してはならない。

バビロン捕囚後のペルシア時代、さらにヘレニズム時代に入ると、死者がよみがえるであろうという約束がより明瞭に表現されるようになる。イスラエルの神は唯一の神として、全被造世界の支配者であり、それゆえ、死と陰府（シエオール）をも支配される方であるとの確信が明確に示されるようになる。

ヘレニズム時代（マカベア戦争を経験した時代）に入ってからのものである。最初期の黙示文学の一つダニエル書には、より字義的な意味で、個人が復活するという希望について語られるようになる。例えば、ダニエル書 12 章に注目。

「地の塵となって眠る人々の中から、多くの者が目覚める。ある者は永遠の命へと、またある者はそしりと永遠のとがめへと。悟りある者たちは大空の光のように輝き、多くの人々を義に導いた者たちは星のようにとこしえに光り輝く」（ダニ 12:2-3）。

7) 上村静訳「偽エゼキエル」『死海文書Ⅶ 聖書の再話 2』（ぶねうま舎、2019 年）189-190 頁。

ダニエル書のこの部分（7-12章）は、前160年代に、その時代に起こった危機（シリアのセレウコス朝によるユダヤ教の弾圧）を背景に成立したもので、黙示文学の一つと見なされている。

補遺2 黙示文学、黙示思想について

ここで復活信仰成立の重要な土壌にもなった黙示文学、黙示思想について一言述べたい。「黙示」は「覆いを取る」という意味のアポカリュプシス（黙1:1参照）という語に由来する。「黙示」は「隠されていたことが明らかになる」ことを意味し、黙示文学においては、ある人物（例えば、ダニエル、エノクなど。多くの場合は昔の父祖や英雄）が隠されていた神の奥義を（天使などを通して）特別に明らかにされるという場面設定がしばしば見られる。黙示の見者は、天上の世界を含む宇宙全体に対する、そして創造の初めから終わりの時に至るまでの超越的な神の御旨と御業を、天に上げられるなど特別な視点を与えられて、垣間見ることがゆるされる。黙示文学には、「この世」と「来るべき世」、「義人」と「罪人」といった二元論的な思考、終末までの時間を計算しようとする試み、切迫した終末期待、最後の審判などのモチーフもしばしば見られる。二元論的な思考や終末思想の背景には、ペルシア時代に接触のあったゾロアスター教などからの影響があると多くの学者は考える。

しかし、このような思想がユダヤ教にさらに影響力をもつに至った背景に、ヘレニズム文化との衝突およびその影響を見ることができる。例えば、（律法に忠実な）義人がなぜ苦しみ、（ヘレニズム化に同化する）罪人がなぜ力を誇っているのかといった、いわゆる神義論的な問いが背景に見出される。その結果、正義の神は必ず報いてくださり、悪を滅ぼし、義人を救ってくださるという救済と審判の希望が生まれる（例えば、ダニ7章を参照）。しかし同時にヘレニズムからの影響も見られる。個人という価値の発見がヘレニズムの大きな特徴だとするならば、黙示思想に見られる個人の死後の運命（『第一エノク書』22章、ダニ12章など参照）に関する思索はヘレニズムの影響とも言える。ヘ

レニズムからの影響は強烈なもので、ヘレニズムに抵抗する者たちの思考にすら影響を与えていると言える。

この関連で、メシア待望についても短くコメントしたい。メシア（マシアッハ）とは「油注がれた者」の意で、本来神から特別な使命を与えられた王、祭司、預言者たちに対して用いられた。しかし、黙示思想などからの影響のもと、メシア待望にも変化が生じ、終末時に出現する超越的天的な解放者の待望へと展開していく。例えば、ダニエル書7章の「人の子のような者」を参照。しかし、メシア期待はすべてのユダヤ人に共有されていたわけではなく、また一貫したメシア観が存在していたわけでもない。かなり漠然とした多様な理解にとどまっていた。

(2) 第二神殿時代ユダヤ教に見られる復活信仰

すでにダニエル書12章について一瞥したが、同時代（第二神殿時代後期）のユダヤ教諸文書をさらに探ることによって、その時代にどのような復活信仰が展開され、それが多くのユダヤ人に共有されるようになったかを見ていきたい。もちろん、第二神殿時代後期の文献は膨大にあり、復活信仰を反映していると思われるテキストも数多くある。このリサーチで注目するのはその一部にすぎないことをお断りしておく。

〈死んだ者の存在についての思索——どう展開していったか?〉

すでに述べたように、死んだ者たちが行き着く場所として「シェオール」という場が考えられ、死者はそこで影のように存在しているというのが古くからのイスラエル人たちの考え方であったと思われる。しかし、次第に終末信仰が展開されていくようになる。そして「この世」の終末、「来るべき世」の到来が期待され、終わりの日に神の審判が行われるという信仰が広く共有されるようになっていく。

そのような中で、死者の運命についても思索が進む。例えば、生前の歩みがどうであったかを問わず、皆シェオールに行くという素朴な考え方では済ま

ない現実直面する。現実には、律法にふさわしく敬虔に生きた義人もいれば、不敬虔な生き方をしてきた罪人もいる。どちらも死後同じ運命になるとしたら、それは不公平ではないか。そう考えられるようになると、そこでシェオールは終わりの日の神の裁きを待つ場所となり、裁きを前にする中間状態に関する思索も生まれるようになる。

例えば「寝ずの番人の書」に属する『第一エノク書』22章によれば、見者エノクは四つの窪地を見るが、それらはすべての人間の靈魂が集められ、最後の審判を待っている場所であり、一つは義人のため、残りの三つは罪人の魂のための場所である（以下、『第一エノク書』の翻訳はすべて村岡崇光訳）。

「そこからわたし（＝エノク）は別のところへ行ったが、彼は西方に大きな、高い、堅い岩から成る山を見せた。そのなかに、深くて、幅が広く、平坦な窪地、四つの場所があった。……ラファエルが、わたしにむかって口を切った。『この窪地は、靈魂、死者の魂が集まってくるようにと、彼らのために造られたのです。すべての人間の魂はここにもどって来ます。これは、彼らを住まわせるためにしつらえられた場所であり、彼らのさばきの日、遠いさきのことである』」（『第一エノク書』22:1-4）。

人間は死後どのような存在として、裁きの日までとどまるのか。いわば中間状態に関する描写は様々な表現でなされ、一様ではない。多くのテキストでは、「眠り」と表現される。すでに言及したダニエル書12:2に加え、『第一エノク書』91:10（「義人らは眠りから醒め、知恵が醒めて彼らに与えられる」）、92:2（「義人は眠りから醒めて立ち、義の道を歩む」）などを参照。同様な考え方は新約聖書にも見られる（Iコリ15:51、Iテサ4:13、マコ5:39など）。

第二神殿時代を通じて、明確な終末期待、来るべき世への希望、そして死者の中間状態に関する思索も展開され、それらに基づいてよりはっきりした復活信仰も生まれてくる。一例として以下を参照。

「しかし、世界の年が満ちたとき、そのとき光は絶え、闇は消えるだろう。そして私は死人を生かし、眠りにについている者を地から立ち上がらせるだろう。また陰府は借りたものを返し、滅亡〔の国〕は預かったものを元に戻すだろう。それは各人にその行為に応じて、またその行いの実りに応じて、私が報いるためである。魂と肉の間を私が裁くまで。そして世界は途絶え、死は消え、陰府はその口を閉じるだろう。そして地は、そこに住む者たちにとって実を結ばぬものでも不毛でもないだろう。また私によって義とされた者は一人もけがされないだろう。そして別の地と別の天が永遠の住まいとして存在しているだろう」（『聖書古代誌』3:10、井阪、土岐訳、13-14頁）。

〈復活するのは、義人のみか？ それともすべての人か？〉

終末における復活の期待が展開されるようになると、その際一体誰がよみがえるのか、という疑問も起こってくる。多くのテキストでは、義人のみが復活すると考えられているが、また他のテキストではすべての人が復活するとも信じられている。いずれにせよ、明確で一貫した考え方があったとは思われない。

・「義人のみの復活」について述べているテキスト

「罪びとは永遠に滅び、主が義人に目を注ぐときにも憶いだしてもらえないだろう。それが罪びとの永遠の分けまえだ。しかし主を畏れる者たちは永生へ甦えり、彼らの命は主の光のうちにあり、もはや絶えることはないだろう」（『ソロモンの詩編』3:11-12、後藤光一郎訳）。

「すなわち義人の命は末永く、罪人はとり去られて滅びに至るだろう。そして彼らの名ごりはもはや見出されることはない」（『ソロモンの詩編』13:11）。

この関連で、『第二マカベア書』7章にも注目したい。マカベア戦争下における、ある母親と7人の息子の殉教の様子が描写されている箇所である。シリア王

アンティオコス 4 世エピファネスに対して末の息子が次のように言う。

「すべての人間の中で最も汚れた不敬な者よ、みだりに思い上がるな。お前は空しい望みを掲げて高ぶり、天の子らに対して手を振り上げている。すべてを見通される全能の神の裁きを、お前は少しも免れていないのだ。今や我々兄弟は、永遠の命のために、つかの間の苦悩を耐え忍び、神の契約の下に倒れた。だがお前は、神の裁きによって、尊大さに対する正当な罰金を支払うこととなる」(『第二マカベア書』[マカバイ記二] 7:34-36, 聖書協会共同訳)。

・「すべての者の復活」(普遍的復活)について述べているテキスト

すでに言及したダニエル書 12:2 によれば、眠りについていて多くの者が目覚め、ある者は永遠の命へ、またある者はそしりと永遠のとがめへと復活させられると語られている。しかし厳密にいえば、すべての人の復活とは言えないのかもしれない。

むしろ、より普遍的な復活の期待に関しては、次の箇所を参照。

「すべて(の人間)は、ある者は栄光のうちに、ある者は恥辱のうちに、甦る。初めに主はイスラエルをその不義のゆえに裁く」(『十二族長の遺訓』ベニヤミン 10:8, 笈川博一、土岐健治訳)。

「しかし、すでに万物が灰燼^{かいじん}に帰した時、神は筆舌を超えた火をも、それを燃やしつけた時と同じように、鎮められる。神はみずから人間の骨と灰にもとのごとく形を与え、ふたたびかつてあったように人間を立たせられる。その時には審きがある。そこにおいては神みずからが、ふたたび世界を審き、宣告を下される。不敬虔によってひそかに罪を犯した者は、地塊と、陰湿なタルタルスの世界と、ゲヘナの奥深いステュクスの場所が覆う。敬虔に生きる者たちは、再び地上に生きる。なぜなら神が霊と命と恵みと

を敬虔な者たちに与えたからである。その時すべての者は自分自身を見るだろう。また太陽のうれしく、喜ばしい光を見るだろう。その時までいる人は、おおもっとも幸いなことよ！」(『シビュラの託宣』4:179-192, 柴田有訳)。

「定められたその日が過ぎたのち、そののち、罪人とせられる者たちの姿および義人とせられる者たちの栄光が変化するであろう。いま不義を行なっている者たちの姿は、彼らが拷問に耐えられるように、いまよりもっと悪くなるであろう。同様に、いまわたしの律法に照らして義人とされている者たち、その生涯において叡知を獲得した者たち、その心に知恵の根を植えつけた者たちの栄光も、彼らの顔も変化して輝き、彼らの顔形は彼らの栄光の光に照らされて変わり、彼らに約束されたところの死することなき世界をわがものとして受けとることができるようになるであろう」(『第二(シリア語)バルク黙示録』51:1-3, 村岡崇光訳)。

「(アダムに塗るための油を得る) その願いがかなえられるのは、今ではなく終わりの時なのだ。その時にはアダムからその大いなる日に至るまでのすべての肉体が、すなわち聖なる民となるであろうすべての者たちが、甦るであろう」(『ギリシア語 アダムとエバの生涯』[モーセの黙示録] 13, 土岐健治, 小林稔訳)。

「お前(＝アダム)は土であり、やがて土にかえるであろうとお前に言っておいた。終わりの甦りの日にわたしは、お前の末裔なるすべての人間とともにお前を甦らせるであろう」(『ギリシア語 アダムとエバの生涯』41)。

〈体のよみがえりか？ 靈魂の不滅か？〉

死後の命に関する思索において、第二神殿時代後期(前3世紀-後1世紀)に大きな変化が起こる。それはヘレニズムからの文化的影響である。ヘレニズ

ムに対するユダヤ人たちの姿勢は様々であった。マカベア戦争に現われているような過激なヘレニズム化に対するユダヤ人たちの抵抗のようなものから、積極的に順応しようとするものまで、様々な反応があった。しかし興味深い点は、ヘレニズム期に入ると、次第に個々人の死後の運命についての関心が深められていくようになるが、そのような思索（個人への関心）自体がヘレニズムからの強い影響の結果と言えるかもしれない。

ヘレニズム時代には、個人への関心に加え、靈魂不滅というギリシア的な考え方もユダヤ人たちの思索に影響を及ぼすことになる。その影響は大きく、第二神殿時代ユダヤ教諸文献における復活に関する言及も極めて曖昧かつ複雑で、「靈魂不滅か、死者の復活か」というような二者択一の議論は通用しないのが現実である。この点で、オスカー・クルマン『靈魂の不滅か死者の復活か——新約聖書の証言から』（岸、間垣訳、日本キリスト教団出版局、2017〔1966〕年）は、有益な論述が多く含まれる優れた作品であるけれども、そのテーゼは単純化のそしりを免れない。

靈魂不滅の考え方が比較的明瞭に示されている例としてまず『ソロモンの知恵』に注目する。

「神は人間を不滅の者として創造し、ご自分の永遠性の似姿として造られた。死は悪魔の妬みによってこの世に入ったのであり、悪魔の仲間となった者は死を味わう」（『ソロモンの知恵』〔知恵の書〕2:23-24、聖書協会共同訳）。

「人間の目には懲らしめを受けたように見えても、彼ら（＝正しい人たち）には不死への満ち満ちた希望がある」（『ソロモンの知恵』3:4。5:15も参照）。

「私は知恵によって不死を得、後の人々に永遠に語られる記憶を残す」（『ソロモンの知恵』8:13）。

「朽ちるべき体は魂の重荷となり、地上の幕屋は悩みに満ちた知性を圧迫します」(『ソロモンの知恵』 9:15)。

この関連で、『偽フォキリデス』 111-115 も興味深い。

All alike are corpses, but God rules over the souls.
Hades is (our) common eternal home and fatherland,
a common place for all, poor and kings.
We humans live not a long time but for a season.
But (our) soul is immortal and lives ageless forever.
Translated by P. W. Van Der Horst (Charlesworth, Vol. 2, p. 578)

紀元1世紀のユダヤ人歴史家ヨセフスによれば、エッセネ派(その一派が死海文書に関わるクムラン教団か)やファリサイ派は復活信仰を共有していたと言われる。ヨセフスはヘレニズム・ローマ世界に広く受け入れられる表現を用いながら、彼らの復活に関する考え方をヘレニズム・ローマ世界で広く受容されていた靈魂不滅の考えに基づいて紹介している。エッセネ派については、例えば、ヨセフス『ユダヤ戦記』 2:119 以下、とくに 154-158 を参照。またファリサイ派については、ヨセフス『ユダヤ戦記』 2:162-163 を参照。サドカイ派が靈魂の不滅を信じなかったとの言及も見られる。『戦記』 2:164-166 参照。復活をめぐるファリサイ派とサドカイ派の見解の違いについては、使徒行伝 23:6-9 も参照。

以上のように、これらの第二神殿時代ユダヤ教文献において、靈魂の不滅と復活との間のはっきりした区別はほとんど存在しないかのように思われる。

しかし、そうではあっても、魂の不死性は本来人間に備わっている生来の(自然的)性質というよりも、神の恵みによって与えられるものと見なされている。その点がその時代のユダヤ人の宗教性の特徴とも言える。

興味深いことに、身体と霊（あるいは魂）の区別の考え方は、終末における復活を待つ中間状態をどう考えるか、という課題との関連において役立てられているように思われる。すなわち、いくつかのテキストにおいて、死んだ人間の肉体は墓地に葬られ、朽ちていくけれども、魂（あるいは霊）が何らかの仕方（神に守られるなどして）失われていない、と考えられている例が見出される。むしろ 20 世紀のプロテスタントの神学者が想定するような、（霊、魂、体の人格全体が死ぬ）「完全な死」（Ganztod）という考え方は見られないと言ってよいであろう⁸⁾。

「わたし（＝アダム）が死んだならば、お前たち（＝エバたち）はわたしの（遺体）をそのまま放っておきなさい。主の天使がわたしについて何事か語るまで、だれもわたしに触れてはならない。神はわたしのことをお忘れにならず、お造りになったご自分の器を探し求めたもうであろう。むしろ、わたしがわたしの霊を、それを与えてくださったお方のお手にお返しするまで、立ち上がって神に祈りなさい」（『ギリシア語 アダムとエバの生涯』 31）。

「祈り終わると彼女（＝エバ）は天をあおいで立ち上がり、胸を打ちながら言った。『万物の神よ、わたしの霊をお受けください』。そしてただちに神にその霊を委ねた。彼女が死ぬと天使長ミカエルがやって来た。さらに三人の天使たちが来て彼女の身体を取り、アベルの身体のある場所に葬った。天使長ミカエルはセツに言った。『甦りの日まで、すべて死んだものはこのように葬りなさい』（『ギリシア語 アダムとエバの生涯』 42-43）。

「三日後にヨブは病気になり、床についたが、苦しみや痛みはなかった。

8) 辻学「解題」オスカー・クルマン『靈魂の不滅か死者の復活か——新約聖書の証言から』（岸千年、間垣洋助訳、日本キリスト教団出版局、2017 年）79-85 頁。

……さらに三日後に、彼は彼の魂へとやって来た者たちを見た。……彼女ら（＝ヨブの娘たち）がこれらを受け取ると輝く戦車が彼の魂へやって来るのが見えた……。その後、大きな戦車に乗っていた者が、（戦車から）おりて来て、ヨブに挨拶した。……そのお方は、（ヨブの）魂を取ると、（それを）腕にかかえて飛び上がり、戦車に乗せて、東方へ向かった。一方彼の肉体は布に包まれて墓へ運ばれた。彼の三人の娘たちが先導した。彼女らは帯をしめ、父をたたえる歌を歌っていた」（『ヨブの遺訓』 52:1-12, 土岐健治訳）。

では、第二神殿時代ユダヤ教の諸文書において、「体（身体）のよみがえり」という考えが一体どこまで鮮明に語られていると言えるか。これはなかなか容易には答えられない問題である。また生前の命（存在）と復活の命（存在）との間にどこまでアイデンティティの（人格的）連続性が認められていると言えるか。これも明確な答えを得ることが難しい問題である。しかし以下において、何らかの仕方で生前の命と復活の命の連続性を示していると思われるテキストに注目してみたい。まず『第二マカベア書』 7:10-11, 7:22-23 を見てみよう。これは、殉教する7人の息子の物語における、3番目の息子の言葉である。

「私はこれらを天から受けたが、主の律法のためなら惜しくない。主からこれらを再び受けることを希望している」（『第二マカベア書』 7:11）。

彼らの母親の言葉にも注目しよう。

「ですから、世の造り主、すなわち人間を生まれさせ、万物を生じさせる方が、憐れみをもって、霊も生命もお前たちに再び与えてくださいます」（『第二マカベア書』 7:23）。

さらにこの関連で、以下の文書にも注目したい。

「なぜなら、地において私を解放しようとなさる方は永遠であることを知っている。これらのことを耐えた私の皮膚を立ち上がらせてくださるように」(ヨブ 19:25-26, 70 人訳, 私訳)。

「神はみずから人間の骨と灰にもとのごとく形を与え、ふたたびかつてあったように人間を立たせられる」(『シビュラの託宣』 4:181-182)。

「お前も天に迎えられるだろう。しかし、お前の身体はこの地上に残されるであろう。七千年の時が満ちるまで。その時になれば、すべての身体が甦らされるだろう」(『アブラハムの遺訓』 7:16-17 B 版, 廣石訳)。⁹⁾

復活は、生前の存在と新しい存在との間の連続性が前提されていると言いつつも、復活において何らかの変容が起こるという考え方も重要である。このような考え方は新約聖書の復活信仰にも影響を与えている (I コリ 15:52 など)。この関連で、以下に復活において何らかの変容が起こることを示すテキストを挙げてみよう。例えば、復活させられた者は「天使のようになる」、あるいは「天において星のように輝く」と表現されることが多い。

「義人たちよ、……希望をもつがよい。かつては不幸や難儀で恥ずかしい思いをしたであろうが、これからは、きみたちは空の光のように輝き、(みんなの前に) 姿を現わし、天の門はきみたちのために開くであろう」(『第一エノク書』 104:1-2)。

「彼らは、義人たちが燦然と輝く一方で、闇の中に生まれた者たちが闇の中に投げ込まれるのを見るであろう。罪びとたちはわめきたて、彼らが輝く

9) 廣石望『新約聖書のイエス——福音書を読む 下』(NHK 出版, 2019 年) 142 頁。

さまを見るであろう。そして、彼らの（処罰の）日と時とが書き記されている場所へ立ち去るのである」（『第一エノク書』108:14-15）。

「一方（＝義人）は天使の姿に似、他方（＝罪びと）は幻に驚き、（互いの）姿を見せられたときにはいよいよもってしょげることだろう。……もはや時は彼ら（＝義人）を老いさせないであろう。彼らはその世界の高みに住まい、天使に似たものとなり、星と肩をならべ、自分の好きなように姿を変え、美から華麗へ、光から栄光の輝きへ（と変わる）」（『第二バルク黙示録』51:5-10）。

「また、節制を行ってきた人々の顔は星にまさって輝くことになり」（『第四エズラ記』7:125）。

しかし、この変容を伴う復活という出来事は、身体性（魂、霊、体の統一体）を伴うもの（つまり、身体のみみがえり）なのであろうか。その点、第二神殿時代の文献はあまり明瞭には語っていないように思われる。しかしすでに言及したテキストをふまえると、何らかの仕方で魂（霊）と体が再び復活の際に一体とされる、そのことを想定しているように思われる¹⁰⁾。この関連で、すでに引用した『シビュラの託宣』『アブラハムの遺訓』『ギリシア語 アダムとエバの生涯』『ヨブの遺訓』の箇所を参照。

〈神の民の希望としての復活〉

第二神殿時代のユダヤ人の復活信仰は、個々人ののみみがえりについて語られる際にも、常に神の民イスラエルの回復、再生と結びつけられて展開されている

10) G. シュテンベルガー『ユダヤ教——歴史・信仰・文化』（A. ルスターホルツ、野口崇子訳、教文館、2015年）196頁。Richard Bauckham, “Life, Death, and the Afterlife in Second Temple Judaism” in ed., Richard N. Longenecker, *Life in the Face of Death: The Resurrection Message of the New Testament* (Grand Rapids: Eerdmans, 1998) 80-95, esp., 87-88.

ったことが多くのテキストから確認できる。

「息を引き取るばかりになって彼（＝二番目の兄弟）は言った。『悪人（＝アンティオコス4世・エピファネス）よ、お前は我々を今の生から解き放つが、世界の王は、ご自身の律法のために死ぬ我々を、命の永遠のよみがえりへと復活させてくださる』」（『第二マカベア書』7:9、七人兄弟の殉教物語から）。

この箇所は、神の民の一員として律法のために命を捨てる者に対する希望として復活が約束されている、そのような例として重要である。

さらに、

「これらのあとでアブラハム、イサク、ヤコブがよみがえり、わたしと兄弟たちはイスラエルで部族の長となる。……悲しんで死んだ者は喜びによみがえり、主のゆえに貧しい者は富ませられ、主のために死んだ者は生命に目覚める」（『十二族長の遺訓』ユダ25:1-4）。

「さあ子供たちよ、わたしが死ぬからといって悲しむな。わたしが去るからといってなげくな。わたしは彼の子供たちの中で指導者として、ふたたびお前たちの真中によみがえり、主の律法と彼らの父、ゼブルンの命令を守るわたしの部族の中で喜ぶ」（『十二族長の遺訓』ゼブルン10:1）。

「というのも、彼ら（＝族長たち）は、『主がその救いを全異邦人にあらわすまで、神のいましめを守れ』と言って、これらすべてを遺産としてわれわれにくれたからである。その時、エノク、セツ、アブラハム、イサク、ヤコブが（神の）右に喜んで立っているのを見るだろう。その時、われわれも、〈へりくだって人の姿で地上に現われた〉天の王を拝しながらおのおのがわれわれの部族に従って甦る」（『十二族長の遺訓』ベニヤミン10:5-

7. 〈 〉 内は後のキリスト教的付加)。

「またあなたたち皆一人一人の最期には、永遠の生のうちにあなたたち皆
各々の分け前があるであろう。あなたたちとあなたたちとの子孫のため
に。そして私はあなたたちの魂を受け取り、世の時が満たされるまでそれ
らの魂を平安のうちにしまっておくであろう。私はあなたたちをあなた
たちの父祖に返し、またあなたたちの父祖をあなたたちに返すであろう」
（『聖書古代誌』 23:13）。

その他、『アブラハムの遺訓』 20 章、『第四マカベア書』 9:21-22, 18:23 をも
参照。

〈メシアと復活との関係について〉

第二神殿時代後期（前 3 世紀-後 2 世紀）において、メシア（油注がれた者）
の概念は終末論的に解釈されていくようになり、その結果、終末時に出現する
超越的天的な解放者としてのメシア像すら出現する。ではたして、そのよう
なメシア期待は復活信仰と結びついているのであろうか。非常に限られたテク
ストにおいてのみ、メシア期待と復活信仰との結びつきを確認できる。

まず注目したいのは、死海文書からの断片、「メシア的黙示録」あるいは
「復活について」と名付けられた 4Q521 である。4Q521 の断片二コラム 2 の冒
頭（1 行目）に、「[天]と地は彼の油注がれた者（メシア）に従うであろう」
という言葉が見出される。それに続いて、主なる神がなさるであろう驚くべき
御業が語られていく。

「たしかに主は敬虔な者たち（ハシディーム）を探し、義なる者たちを名
で呼ばれるであろう。そして彼の霊を貧しい者たちのうえに置かれ、忠実
な者たちを彼の力で新たにされるであろう。彼は敬虔なる者たちを永遠な
る王国の御座の上で栄誉を与え、囚われている者たちを自由にし、目の見

えない者たちに視力を与え、〔曲げられた者〕たちをまっすぐにされるであらう。……そして主は存在しなかったような驚くべき業を行われるであらう。彼が言われた通りに。すなわち、彼はひどく傷つけられた（殺された）者たちをいやし、死んだ者たちを生かし（חַיִּים），貧しい者たちに福音を告げるであろう」（4Q521 断片二コラム 2, 5-12 行目）。¹¹⁾

興味深いメシアと復活との結びつきが見出されるように思われるが、文脈を見る限り、復活の出来事はどこまでもメシアの業としてではなく、主なる神の業として語られている。

より明確なメシアと復活との関連については、『第四エズラ記』7:26 以下、および『第二（シリア語）バルク黙示録』30:2-5 を参照。

「見よ、その時が来る。その時には、私がすでにあなたに告げたしるしが来る。……わが子イエスが、彼に従う人々と共に現れ、残された人々には四百年にわたる喜びがあるだろう。これらの年月の後、わが子キリストも、息ある人々も皆死ぬだろう。そして世は、七日の間、原初の時のような太古の静寂に戻り、誰一人そこには残らない。七日間が過ぎると、まだ目覚めていない世は揺り起こされ、朽ちた世は滅びる。地は、その中に眠るものを、塵はその中に黙して住む者を差し戻し、陰府の小部屋はそこに預けられていた魂を差し戻す。そして、いと高き方が裁きの座に現れる。その時、憐れみは過ぎ去り、忍耐は消えうせる。残るのは、ただ裁きだけである。真理は堅く立ち、信仰は強められる。裁きの業がなされ、ふさわしい報いが示される。正義は目覚め、不正義はもはや眠ることはできない。やがて懲らしめの池が現れるが、その向かい側には安息の場がある。またゲ

11) Florentino Garcia Martinez and Eibert J. C. Tigchelaar, *The Dead Sea Scrolls: Study Edition* (Vol.2; Leiden: Brill, 1997) 1044-45 の原典テキストおよび英訳に基づく私訳である。多くの学者が、4Q521 とマタイ 11:5（＝ルカ 7:22-23）との関連に注目し、研究していることを付け加えておきたい。

ヘナのかまどが示され、その向かい側には喜びに満ちた楽園がある」(『第四エズラ記』7:26-36, 聖書協会共同訳[この箇所にはキリスト教徒による付加も含まれる])。

「そののち、メシアの滞在の時が充ちて彼が栄光のうちに帰還されるとき、そのとき、彼に望みをつないで眠っていたものはみな復活するであろう。そのとき、一定の数の義人の魂のしまってある倉が開き、(その魂が外に)出てきて、多くの魂が思うところをひとつにし、みな一団となって姿を現わすであろう。さきのものは喜び、あとのものも悩むことをやめるであろう。彼は、(これが)終末だと言われていたその時が到来したことを知っている。しかし、不敬虔な者の魂は、これらすべてのことを目にするや、すっかりしょげてしまうだろう。彼らは自分たちが責め苦と、破滅(のとき)が来たことを知るのである」(『第二バルク黙示録』30:2-5, 村岡崇光訳)。

以上、後70年以降に成立したこれらの黙示文学において、終末での復活について語られる際、メシアとの何らかの関わりがほのめかされてはいる。けれども、復活の出来事自体は、どこまでも神中心的に(主なる神の業として)描かれているように思われる。つまり、第二神殿時代後期の諸文書からは、復活信仰とメシア待望との結びつきを明確に見出すことはできない、というのが結論になるであろう¹²⁾。その点で、原始キリスト教会の復活信仰の独自性も見えてくる。すなわち、ただ一人の方、イエス・キリストにおいてすでに復活が起こり、それがすべての人の運命に関わってくるという信仰内容は、第二神殿時代の信仰にはっきりした土壌を持ちつつ、驚くべき展開を含む信仰内容だ、と言えるだろう。

12) N. T. Wright, *The Resurrection of the Son of God*, 205.

結論

〈まとめと課題〉

第二神殿時代後期のユダヤ教は非常に多様なグループ、非常に多様な主張から成り立っていた。それゆえ、復活信仰に関しても多様な表現を伴って語られたのではあるが、多くのユダヤ人に広く受容されていた信仰になっていたという事実も確認できたように思われる。さらに復活信仰は、紀元 70 年のエルサレム神殿崩壊後再建されていった、いわゆる「ラビ・ユダヤ教」においても広く共有される重要な信仰内容であり続ける。例えば、ラビ・ユダヤ教において重要な祈りとなった『十八祈禱文』（シェモレ・エスレー、オリジナルの祈りはイエスの時代にまで遡り、ユダヤ人たちは一日三回この祈りを唱えた）の第 2 祈禱には、明確な復活信仰が述べられている。以下、パレスチナ版を引用する。

「あなたは全能であり、おごれる者を卑しめなさる。力強く、そして暴れる者たちをお裁きになる。とこしえに生き、死せる者たちを起こしなさる。風を吹かせ、露を置かれる。生ける者たちを養い、死せる者たちを生かさされる。あなたは瞬く間に私たちの救いを生じさせる。あなたはほむべきかな、主、死せる者たちを生かす方よ」。¹³⁾

また紀元 1 世紀に起こったイエス運動においても、復活信仰は最も重要な信仰内容となった。しかし、そのような初期キリスト教の復活に関する信仰が、以上見てきたような豊かな土壌の中ですでに準備されていた事実もまた確認することができたのではないか。かなり漠然とした、しかも多様な表現ではあったが、第二神殿時代のユダヤ人たちの多くが復活に関する希望を抱いており、そのような復活の希望が、イエスの復活に関する信仰を生み出す土壌となった

13) E. シューラー『イエス・キリスト時代のユダヤ民族史Ⅳ』（上村静、大庭昭博、小河陽訳、教文館、2015 年）157 頁参照。

のである。そのような希望に基づきながら、イエスの弟子たちは、ナザレのイエスにおいてすでに復活という終末的事態（歴史の転換点、唯一の神による死と悪の力への完全な勝利）が起こったのだ、と信じたのである。神はイエスを死者の中から復活させ、天にまで高く挙げ、全世界を統治する神の玉座を分かち与えた（詩 110 編を参照）。それによって、今やすべての被造物を刷新する新しい時代が始まったのだ。これがキリスト教信仰の出発点となった確信である。

以上の学びを通して見えてきた特徴をまとめたが、さらにそこから浮かび上がってくる神学的課題について最後に述べてみたい。

(1) 第二神殿時代後期諸文書における復活信仰の展開から見えてくる課題の第一は、死と復活の間の中間状態に関する思索である。良く知られているように、宗教改革者たちがローマ・カトリック教会の煉獄の教理を批判したがゆえに、プロテスタント神学においては中間状態に関する思索が後退してしまったように思われる。その点をもう一度省みてみる必要はないのであろうか。その際、新約聖書に現われる「眠りにつく」(I テサ 4:13)「キリストと共にある」(フィリ 1:23) などの表現をめぐる議論が必要となってくるであろう。

(2) 初期キリスト教における「身体のよみがえり」の強調はどのような文脈で起こったものなのかを、もう一度丁寧に見直してみる必要があるかもしれない。すでに確認したように、「身体のよみがえり」の希望は第二神殿時代後期のユダヤ人たちに遡ることは確かであるけれども、なお曖昧な（多様な）仕方で語られていた。紀元 2 世紀になって初期キリスト教においてなぜ復活の身体性が極めて重要と見なされるようになったのか、その歴史的な文脈をしっかりと学び直す必要があるように思われる。

(3) 第二神殿時代後期の文献を見ていくと、メシア期待と復活信仰は明確には結びついていないことが分かった。復活する（した）メシアに関する信仰は存在しない（その意味でイエスはメシアだから復活したのではない！）と言って良い。むしろ、復活信仰とメシア待望という（本来は別々に生まれてきた）

二つの信仰の側面がユニークな仕方で結合し、展開されていった点に、初期キリスト教の信仰の大きな特徴がある。使徒パウロは言う。

「しかし今や、キリストは死者の中から復活し、眠りに就いた人たちの初穂となりました」(I コリ 15:20)。

ただ一人の方、イエス・キリストがすでに復活された。そのことがすべての人の復活へと道を開く突破口となった。このような独特な復活信仰の展開こそ、キリスト教の重要なメッセージのポイントなのである (I コリ 15:12 以下参照)。

(なかの・みのる)